

機関番号：84601

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720181

研究課題名 (和文) 氏寺を中心とした中世地域社会構造の研究

研究課題名 (英文) The research of regional structure felt for from family temple in the middle ages

研究代表者

坂本 亮太 (SAKAMOT RYOTA)

財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：40435904

研究成果の概要 (和文)：本研究では、相良氏の氏寺である肥後国人吉荘願成寺 (熊本県人吉市) の存在形態を分析した。願成寺はもともと荘園の祈願寺であったのが、後に武士である相良氏の氏寺として取り込まれた寺院であった。武士は氏寺を媒介にして地域の支配を行っていた。戦国時代になると、中央の寺院で修行した願成寺僧が、仏教儀礼を通じて周辺寺院を末寺にしていく。氏寺が、檀那に依存するばかりでなく、仏教儀礼を通じて、地域の中核的な寺院として近世に変容していく様相をみることができる。

研究成果の概要 (英文)：I researched the existence form of Sagara family temple-Ganjoji in Higo-no-kuni Hitoyoshi-no-sho(Hitoyoshi city in the Kumamoto prefecture). Originally, Ganjoji was manor prayer temple. Afterwards, Sagara family took Ganjoji as a family temple. Samurai was ruled regions as mediation of family temples. In the warring states periods, as mediation of the Buddhism-etiquette, Ganjoji made surrounding temples to the branch temples by Ganjoji-monk studied in the center temples. In the early modern age, Family temples did not depend on sponsors. And family temple transformed a central temple in regions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：日本中世史

科研費の分科・細目：人文・日本史

キーワード：日本史、中世、地域社会、武士、寺社

1. 研究開始当初の背景

前近代社会には、実に様々な寺社が存在した。そのため、その成立事情や社会的機能も様々であることが予想される。これらの寺社に関しては、黒田俊雄氏や井原今朝男氏などにより諸類型が提示され、様々な存在形態を持つ寺社の姿が明らかにされてきた (「寺社

勢力論」、『寺社勢力』、『中世寺院と民衆』など)。しかしながら、氏寺と荘園・村落や顕密体制 (寺社勢力論) との関連性については、十分な検討がなされておらず、その位置づけを含め、なお検討の余地を多く残しているように思われる。

申請者はこれまで、荘園鎮守・在地寺院・

村落寺社を素材に、畿内近国の荘園・村落における地域構造、宗教秩序の解明に取り組んできた。しかし、対象地域をおもに畿内近国としていたため、在地領主層の姿が見えにくく、その氏寺・菩提寺に関しては部分的に触れたのみであった。

そのような経緯から、在地領主層と寺社との関わり、とりわけその象徴的存在である氏寺・菩提寺について究明する必要があること、畿内以外の地域事例を取り上げるべきこと、などの諸課題が残されていると認識しており、本研究を着想するに至った。本研究を遂行することにより、申請者のこれまでの研究を相対化し、荘園制下における地域社会構造（宗教秩序）の変容過程を、動的かつ立体的に解明できるのではないかと考えている。

2. 研究の目的

本研究においては、在地領主（武士）層の氏寺・菩提寺の存在形態、とりわけ氏寺が在地領主・荘園・村落・周辺寺社などと結ぶ社会的関係を明らかにすることにより、中世における地域社会の構造を捉えようとするものである。

3. 研究の方法

本研究においては、個別のフィールドを設定し、そのモノグラフを描くことを第一の課題とする。相良氏と肥後国人吉荘願成寺（熊本県人吉市）と球磨郡を事例として取り上げ分析した。この事例から、氏寺が在地領主・荘園・村落・中央寺社・周辺寺社と取り結ぶ社会関係を把握し、中世における氏寺の存在形態を明らかにする。それは氏寺を宗教史的（顕密体制・権門体制論のなか）に位置づけること、荘園・村落を含む地域社会内での在地領を位置づける作業でもある。

また本研究では、中世氏寺研究の到達点である奥田真啓『中世武士団と信仰』を再検証することも課題とする。そのためには、様々な氏寺の地域環境を確認する必要がある。中世における氏寺・菩提寺の地域環境を幅広く確認し、上記の個別事例との比較を通じて、従来の氏寺像を再検証する。特に氏寺と幕府との関係、氏寺と「鎌倉新仏教」系諸宗派との関係について、取り上げる。

4. 研究成果

(1) おもな成果と課題

①成果

本研究の成果は、第一に願成寺文書（特に中世分の聖教類を含めて）を再調査し、写真撮影をおこなった点にある。願成寺文書の整理状況、保存状態なども逐一把握し、人吉市

教育委員会・願成寺に本調査研究のデータを提供した。その結果、資料閲覧、今後の管理対策に役立てられるようになったのではないかと。

第二に、多数残されている戦国時代の聖教類を調査することにより、地域における聖教の意義を明らかにできた点である。これまで聖教類は、中央の大寺院のものが注目され、また寺院内の問題として位置づけられることが多かった。しかしながら、地方の寺院に残る聖教類を分析し、地域の中での役割を探ることで、寺院ネットワーク・本末関係なども含めた地域社会構造を明らかにできるようになる。その一例として、願成寺の事例は大きな意味を有する。

第三に、各地の氏寺資料（近世の地誌や現地景観調査など）の収集をしたこともまた大きな成果と考える。これまで体系だった氏寺の研究は、奥田真啓『中世の武士団と信仰』のみであったが、それを相対化するための材料が揃ったことである。

②課題

本研究の課題は、多くの資料の収集をすることはできたが、具体的な分析については、必ずしも十分に深めることができなかった。今後、これらの素材をもとに、個別の氏寺のあり方を分析するとともに、大きな視野に立って、体系的な氏寺研究を進めていく必要がある。

(2) 願成寺文書の調査

以下では、具体的に調査し、明らかにしたことを述べていきたい。

熊本県人吉市には相良氏の氏寺である願成寺が所在する。願成寺文書に関しては、古くから『熊本県史料』で、100点近い中世文書が紹介されている。

その後、熊本県立美術館、人吉市教育委員会による調査で、中世の聖教、近世の文書・聖教など膨大な数の文書が目録として紹介された。そのなかには戦国期の聖教が多数残されている。しかしながら、これらの聖教類については、一部の研究を除き、ほとんど注目・活用されていない。

本研究では、これら願成寺に伝来した文書・聖教を調査・撮影し（約1100点の調査を実施）、願成寺を中心とした相良氏氏寺の動態を示すことで、氏寺の存在形態とその変遷を検討しようとするものである。

とりわけ、戦国期の聖教類の調査とその分析は、中央の法脈とどのように繋がるのかという畿内の寺社との社会関係を知ることができるとともに、戦国～近世にかけて氏寺がどのように変容するのか、また地域社会における聖教の意義を考えるうえでも、重要な一

例となるものと思われる。

(3) 相良氏と氏寺願成寺

肥後国球磨郡人吉荘願成寺（熊本県人吉市）は、院領人吉荘の荘内安穩、荘園領主の祈禱をする荘祈願寺として存在していたものと思われる。確かに、地頭である相良氏が免田の申請をしているが、その安堵は安嘉門院がおこなっている。

ただし、氏寺は檀那の一方的な支配をうけるのではなく、氏寺自体が一個の社会勢力としても位置していた点には注意しなくてはならない。その点、相良頼氏置文が注目される。

もちろん条々の発給主体は、相良氏であるが、「供僧并時衆可被存知条々」ともあるように、寺僧等が行うべきことが定められている。そのなかには、寺僧が会合をおこなっていること、そして檀那の違乱があった場合には、寺僧が一味同心し、それに従わなかったものは寺僧を追放することが定められている。すなわち、寺僧中に寺僧の改替・補任権があり、また檀那の意を受けるのみの存在ではないことも明らかである。それは別の条でも確認できる。例えば、寺僧は檀那方に意を寄せることの停止などが定められていることはその良い例である。

またこの条々のなかでは、悪行の停止をし、また念仏の勤行を重視している点も見逃せない。言い換えれば、氏寺の檀那は寺僧に戒律を守らせ、念仏を行わせ、またその費用を檀那として確保することがその役目であった。そのためには一定の権限が氏寺に委ねられていたことがわかる。むしろ、ここには檀那（武士）の思惑とは異なる、独自の社会組織として氏寺の位置を認めなければならないだろう。それは、氏寺が在地領主による地域支配の道具としてではなく、氏寺自体の運動方向も見据える必要があることを意味する。

(4) 相良氏の地域支配の特質

また球磨郡内には、相良氏に関わる寺社や宗教施設（経塚など）が多く存在する。

相良氏が肥後（球磨郡）に入部する以前から存在した須恵氏・平河氏・久米氏・矢瀬氏など在地領主層に関わる寺社・遺跡（居館）等を多く確認することができる。

とくに平河氏とその氏寺（荒田観音福田寺など）・大王社のあり方は注目される。平河氏は、永富名などを拠点に球磨郡内に勢力を有していた在地領主である。その平河氏に関わる平河家文書によれば、相良氏が球磨郡に入部し、矢瀬氏や久米氏などを追伐し、その鎮魂のために大王社を祀ったという。また平河氏も相良氏と姻戚関係を結んでいた。相良氏は、既存の在地領主層を制圧、取り込んで

いくなかで、その氏寺・鎮守社にも関わり、供養・鎮魂をおこなっていた。

このように、球磨郡内には相良氏に関与する寺院・経塚が多く設定されている。既存の在地領主層（とその氏寺）を前提にして、それを巧みに取り込むことで、地域支配の円滑化を図っていたともいえるだろう。

(5) 氏寺の近世化

さて、このような形で地域支配をしていた相良氏ではあったが、中世後期には氏寺はどのように変容するのだろうか。残念ながら、室町期の状況はあまり明らかではない。戦国期になると、相良氏の氏寺としての位置は変わらないが、球磨郡内での位置は大きく変容する。戦国時代の願成寺僧勢辰は、高野山・根来寺で修行した僧である。

勢辰に関わる聖教が、願成寺には大量に残されている。これらの聖教類は、戦国期の根来寺の教学活動を知る史料として注目されてきたが、むしろ聖教類が願成寺に残ったことの意義、またそれがどのような役割を果たしてきたのかということが重要である。聖教をみると、願成寺では伝法灌頂などがおこなわれ、周辺寺社の遷宮などに関わったり、法要での導師を勤めたりと、球磨郡内寺院の中心的位置を占めていた。このように願成寺は学問・仏教儀礼を核に、新たに中心寺院として球磨郡内の寺院を末寺化していった。中央寺社との人的関係とそれによって得られた聖教類（寺僧の修行とその成果）が、地域社会の中で（近世の本末制形成にも）大きな役割を果たしていた。

(6) 東の相良氏

相良氏は遠江国蓮華王院領相良荘（静岡県牧ノ原市）にも拠点を有していた。むしろ本貫地であった。この相良荘には、堀之内があり、相良氏の居館があった。また氏寺として常福寺もあったようであるが、その場所などは不明である。伝承によれば、肥後国人吉荘願成寺の開山は、常福寺の寺僧であったというが、確証はない。残念ながら史料が限られており、氏寺などの詳細を知ることはできない。

(7) 他地域との比較

相良氏の事例を踏まえたうえで、他地域との比較をふくめて、氏寺と地域社会の関係を探るなかで、奥田真啓氏の研究も再検討することも可能となる。西遷御家人と氏寺、東国本貫地の氏寺については、簡単ながら前述しているので、特にここでは、氏寺と「鎌倉新仏教」系寺院、氏寺と幕府の関係に関して触れておきたい。

① 氏寺と「鎌倉新仏教」

下野国須長御厨崇禪寺(栃木県桐生市)と藪田氏の事例が注目される。須永御厨崇禪寺は、現在は臨濟宗の寺院であるが、「法然上人絵伝」にみることができる。須永御厨は伊勢神宮領荘園で、藪田氏は開発領主であり、また御家人でもあった。「法然上人絵伝」によれば、藪田成朝が浄土宗に帰依することで、周辺民衆も帰依することになる。その後、年中行事(正月祝言や田遊び)やその費用を出す田地なども設定された。氏寺(と浄土宗化)を媒介に、地域社会・周辺民衆の編成をしていたこと、すなわち氏寺自体が、荘園鎮守・祈願寺と同様の機能を果たしていたことを知りうる。

また肥前国高城寺・尊光寺(佐賀県佐賀市)の事例も注目される。肥前国衙周辺に、在庁官人の高木氏・国分氏があり、一宮である河上社や国分氏の氏寺高城寺(曹洞宗)・尊光寺が位置していた。国衙周辺地域における在庁官人層と氏寺の関係性、禪宗受容の様相を検討できる稀有な素材である。

文永8年に国分氏が氏寺として、また執権北条氏の菩提を弔うため尊光寺を建立した。その後、禅僧を院主として禅寺化し、弘安8年には高城寺と一体化する。

モンゴル襲来と執権北条氏による九州支配とも関わり、氏寺で北条氏の菩提を弔い、また禅宗化する動きのあったことが看取される。当該期の禅律系寺院の展開過程については様々に指摘されているが、氏寺も同様に鎌倉末期に「鎌倉新仏教」系、ないしは旧仏教改革派に帰依していた。

なお、高城寺はその後、河副荘極楽寺や薬師堂の別当職なども獲得していき、荘園の枠を越える活動を展開していくことになった。

②氏寺と幕府

これまで氏寺は武士の信仰の問題、地域社会との関係のなかで捉えられてきた。しかしながら、氏寺で行われる祈禱を踏まえた場合、幕府との関係を検討する必要がある。多くの氏寺で、鎌倉期であれば将軍家祈禱・北条執権祈禱がおこなわれていることが注目される。例えば、先ほど取り上げた事例でいえば、肥後国人吉荘願成寺や、肥前国尊光寺・高城寺などが挙げられる。また氏寺には、源家供養塔などと伝承される石造物が残る点も特徴的である。

すなわち、荘園の祈願寺と同様に、氏寺は将軍・執権の祈願を行っていることになる。氏寺の免田申請と認可という問題とも関わるが、氏寺が幕府の祈願所としても位置していたことに注目したい。それは本末関係とも異なる動態を示すことになる。

こういった状況は、武家領の宗教構造の問題を考えるうえでも重要な点となってこよう。これまで氏寺は荘園制的な寺社関係とは

異なる磁場を形成する核として評価されてきた。しかし、武家領という観点で捉えた場合、氏寺と地域社会(荘園・村落を含む)が結びつなぐ社会関係を、幕府が氏寺を通じて将軍・執権家の祈禱という形で取り込んでいたとも評価できよう。それは荘祈願寺と相似の形をとる。武士の氏寺を武家領の祈願寺として積極的に位置づける必要があるのではなからうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- ・坂本亮太、「書評 蔵持重裕著『中世村落の形成と村社会』」、『史学雑誌』、査読有、117-6、2008年6月、pp94-104
- ・坂本亮太、「中世後期の地域内流通を考える一大和の諸座を事例に一」、『中近世土器の基礎研究』、査読無、22号、2009年12月、pp191-210
- ・坂本亮太、「書評 高木徳郎著『日本中世地域環境史の研究』」、『和歌山地方史研究』、査読無、56号、2010年2月、pp63-69

[学会発表](計3件)

- ・坂本亮太、「中・近世村落における神主と寺僧—近江国栗太郡大宝神社西之坊をめぐって—」、日本史研究会 中世・近世合同部会、機関誌会館、2009年1月13日
- ・坂本亮太、「法灯国師と紀伊国の寺社」、和歌山地方史研究会、2010年7月31日、和歌山大学サテライト
- ・坂本亮太、「中世後期の地方寺院と寺僧・村落—近江国を事例に一」、中世史サマーセミナー@茨城、2010年8月26日、サンルート白河

[図書](計1件)

- ・坂本亮太、坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、「中世都市奈良のなかの元興寺」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざままで—』、2010年11月、pp1213-1220

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 亮太 (SAKAMOTO RYOTA)

財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：40435904

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし